

『中辺分別論』 第 V 章「無上乘品」における 波羅蜜多説について

Vo Thi Van Anh

0. はじめに 波羅蜜多と言えば菩薩の実践行である六波羅蜜多を指すことが多いが、瑜伽行派の文献には十波羅蜜多も説かれている。『中辺分別論』(Madhyāntavibhāga-śāstra, 以下 MAV) 第 V 章「無上乘品」の場合が典型的であり、その十波羅蜜多が菩薩の十地に配当されていることは言うまでもない¹⁾。その他、同品に見られる波羅蜜多説には幾つかの注目すべき点がある。それを本稿において順次に考察していく。

1. 最勝 (parama) としての波羅蜜多 (pāramitā) の語源解釈 波羅蜜多の語源解釈については、「到彼岸 (pāram-√ i-tā)」か「最勝 (parama)」・「完成 (pārami)」かの二説があり、そこには√ i という動詞の存在を認めるか否かという難しい問題がある。その中、pāram-√ i-tā の解釈については、文法的に不可能であると指摘される (F. Edgerton, s.v. “pāramitā”, 三枝 [1981], 渡辺 [1998] など)。しかし、伝統的には「到彼岸」と解釈されているので、その語源・語義についての議論は、近年においても阿 [2006]・定方 [2006] などにより続けられている。語義の問題はそれらの先行研究に詳しい²⁾。語源については、MAV の所説がその解明の一助となるのではないかとと思われるので、以下にそれを考察したい。

MAV-V に説かれる「行無上」の中「最勝行」には十二最勝 (parama) がある³⁾。これらの十二種は波羅蜜多が持つ性質でもあり、安慧によれば波羅蜜多の語源解釈でもある。以下にその註釈を示す。

[Ya 206.8-13]: それ故また〔十二〕最勝の意味で十波羅蜜多であると考えられる。といった。…という語源解釈の方法 (nirukti-nyāya) によってである、それ故、十波羅蜜多の行はまた最勝性と呼ばれる。

要するに、「波羅蜜多」という語を「最勝」によって語源解釈していることが安慧釈の nirukti-nyāya の語で明らかである。このような解釈は MAV の独自の解釈ではない。最勝であるから波羅蜜多であるとする解釈は BBh にも見られる⁴⁾。

それら布施などの十法は、①最勝の時間にわたり修証され、②最勝なる自性清浄の故に

清浄であり、③最勝なる果報を与える。それ故に、波羅蜜多と呼ばれる。

波羅蜜多を三種の最勝で説明している点で、MAVの十二最勝と類似している。最勝であるから波羅蜜多であるとする解釈について、同論がBBhを継承していると言えるか否かは問題である。しかし、同学派の文献であるASBhは、それら二文献に説かれた波羅蜜多の三と十二の最勝を波羅蜜多の釈名(nirukti)という項目に取り入れて、波羅蜜多を定義している⁵⁾。つまり、同学派の文献において、「最勝」を根拠として波羅蜜多の語源を説く用例がASBhにもあり、さらに同様の語源説はMSgにも確認できる⁶⁾。このような波羅蜜多の解釈は瑜伽行派の理解とも言えるように思われるが、これまで波羅蜜多の語源を検討する際に殆ど注目されてこなかった点である。

2. 『中辺分別論』第Ⅴ章の構成から見た波羅蜜多説の位置 MAV-Vは大乗を無上乘たらしめる三種の無上を説く。すなわち、①行無上、②所縁無上、③修証無上である。本章の全29偈中、「行無上」は27偈までであり、1)「最勝行」、2)「作意行」、3)「随法行」、4)「離二辺行」、5 & 6)「特殊な行／特殊でない行」という六項目から構成され、大きな分量を占めている。そこで、最初の1)「最勝行」と最後の5 & 6)「特殊な行／特殊でない行」の位置は注目に値する。すなわち、1)「最勝行」は波羅蜜多説に言及し、次の「作意行」など(2, 3, 4)は、様々な教学を収め、そして最後の5 & 6)「特殊な行／特殊でない行」は再び波羅蜜多説⁷⁾を説いている。つまり、「行無上」の構成、特に「特殊な行／特殊でない行」の位置から見れば、本論の意図は「行無上」のすべてを波羅蜜多と関係させることではないかと思われる。それについては世親釈に見られる。

[Na 60.10-16]: その中、行無上なることとは十波羅蜜多を行ずることとしてであると知られるべきである。而して行は六種がある。それらの波羅蜜多について、①最勝〔行〕と、②作意に関する〔行〕、③随法に関する〔行〕、④離〔二〕辺に関する〔行〕、⑤特殊な〔行〕と⑥特殊でない〔行〕である。という。これらの六種は行である。

下線部の世親釈は「行無上」六種のすべては十波羅蜜多を行ずるということを指すであろう⁸⁾。そして、安慧釈では次の記述がある。

[Ya 201.16-22]: 波羅蜜多の行とは波羅蜜多を実践するのである。…またその行はある行相によって諸波羅蜜多を加行している者にとって無上となる、それらの行相を説示するために、而して行は六種があると説いた。

要するに、六種の行相は波羅蜜多の行が無上となるためにある。すなわち、安慧釈は世親釈と同様の趣旨に沿って解釈し、またこのような理解は同書その他箇所

(112) 『中辺分別論』第Ⅴ章「無上乘品」における波羅蜜多説について (Vo)

にも確認できる⁹⁾。ここで注目したい点は、行は波羅蜜多の性質であり、その行は、安慧釈では菩薩の本質であるとも解釈されている。この点から見れば、MAV-Vは同学派の他論書と異なって¹⁰⁾、波羅蜜多を主題とするが、それらの徳目それぞれの説明より、行としての波羅蜜多の性質の方を重視していると言える。これが同論における波羅蜜多説の一つの特徴であると考えられる。

ところで、同論では、三種無上中、波羅蜜多は「行」だけでなく、「所縁」とも関係づけられると思われる。すなわち、所縁無上の中、「設立された諸法」という項目に対して、これは仏教の諸々の教学を指すとも理解されるが、註釈書では波羅蜜多を主として説明される¹¹⁾。つまり、三種無上からなる第Ⅴ章の中、「行無上」も「所縁無上」も波羅蜜多と関わって解釈しているのである。実際、MAVの全体から見れば、第Ⅳ章では声聞・独覚・菩薩という三乗共通¹²⁾の法行である三十七菩提分法が述べられるのに対して、第Ⅴ章では、菩薩のみの法行が説示されている。その法行 (pratipatti) が所縁及び修証と相俟って、大乘の修行道体系としての「無上乘品」が構成されているのである。

以上の、波羅蜜多は「行無上」にも「所縁無上」にも関わっているという点に、同論の修行道上に占める波羅蜜多の重要な位置が見出されるであろう。併せて、同論が従来の三乗共通の修行道に対して、不共なる菩薩の修行道を波羅蜜多として意図的に区別し、大乘的修行道を確立しようとしていることも推測される。

3. 終わりに 以上の二点にわたり、MAV-Vにおける波羅蜜多説の特徴を指摘した。波羅蜜多の語源説について、瑜伽行派の観点、特に安慧釈に見られる *parama* の語を *nirukti-nyāya* とすることは重要な手がかりとなろう。そして、大乘化していく瑜伽行派においては、大乘的修行道の体系化が必須であったため、大乘教学とされる波羅蜜多を受容し、学派独自の修行道体系が完成されていったという背景を想定できよう。

1) 注7を参照。

2) その中、特に、定方 [2006] p.59 には、「「到彼岸」のニュアンスを欠く *pāramitā* の訳語はかつての般若教徒たちが抱いていた思いを味わい損なわせることがわかった」と結論している。これは、定方氏の論題のように、*pāramitā* の語義について述べておられるのであろう。

3) MAVBh [Na 60.20-61.4]: 最勝〔行〕とは十二種がある。①廣大、②長時、③関心目標、④無尽、⑤無間断、⑥無難、⑦自在、⑧ (智に) 摂受、⑨発起、⑩獲得、⑪等流、⑫究極である。(V.2d-4ab)

4) Wogihara [1971] p.372,6-9.

5) Cf. 早島 [2003] pp.653-655.

6) MSg の波羅蜜多の定義では「最勝なものであり、到彼岸でもある」。このような規定について、長尾 [1987] (p.127) によって、前者は「教理的な語源説」、後者は「俗間語源説」を用いると指摘さ

れている。7) 特殊な行とはある地において特定の波羅蜜多を修習する、特殊でない行は十地のそれぞれにおいて特定の波羅蜜多を修習しながら他の波羅蜜多もあわせて修習するということである (MAV-V.27ab)。この形式は、瑜伽行派論書中 MAV が最初に言及する。初期漢訳『十地経』においても見られるが、MAV のような完成した形式は確認出来ない。8) 実際、波羅蜜多説との関係はこの他の部分にも散見される。例えば、「作意行」の世親釈の中、次のように解釈する。[Na 63.4-6]: 「大乘において施設された通りの経などの法に関する布施等について、聞くこと・思考すること・修習することからなる慧を以て繰り返して作意することは作意行である」。9) [Ya 199.19-23]: 「また、その大乘とは何か、まさにこの行と所縁と修証との三種である。その中で、行無上とは十波羅蜜多を完成させることである。十波羅蜜多を完成することにおいて菩薩の行を無上と称する」。10) 波羅蜜多についての解釈は、瑜伽行派の中、BBh を初めとして、多くの論書に解釈される。その中、MSA, MSg, ASBh は同様に、数などの十項目で詳細に説明する。11) このことは当該箇所 (kk.27cd-28 の世親・安慧釈) の説明に見られる。12) 安慧釈に基づく。序論: [Ya 8.5]; [Ya 8.18]; 第V章: [Ya 199.8]。

〈略語及び参考文献〉

ASBh: Abhidharmasamuccayabhāṣya, 早島理他 [2003] 「梵蔵漢対校 E-TEXT 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』」 瑜伽行思想研究会。BBh: Bodhisattvabhūmi, Unrai Wogihara [1971], *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, repr., Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store (originally published 1930-1936)。MAV & MAVBh: Madhyāntavibhāga-bhāṣya, Gadjin Nagao [1964] *Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A Buddhist Philosophical Treaties*, Tokyo: Suzuki Research Foundation。安慧釈 (MAVṬ): Madhyāntavibhāga-ṭīka, Susumu Yamaguchi [1934] *Madhyāntavibhāgaṭīkā: Exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, Nagoya: Hajinkaku。MSA: Mahāyānasūtrālamkāra, Sylvain Lévi [1983] *Mahāyāna-Sūtrālamkāra: Exposé de la doctrine du Grand Véhicule*, Kyoto: Rinshin Book (originally published 1907)。MSg: Mahāyānasamgraha, 長尾雅人 [1987] 『撰大乘論和訳と注解』下, 講談社。三枝充恵 [1981] 「概説——ボサツ, ハラミツ——」『講座・大乘仏教 1』春秋社。定方晟 [2006] 「「到彼岸」と「完成」——パーラミターの語義——」『東方』22。阿理生 [2006] 「pāramitā の語源・語義について」『印仏研』54 (2)。渡辺章悟 [1998] 「Prajñāpāramitā の四つの語源解釈」『印仏研』46 (2)。Franklin Edgerton [1953] *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol.2, New Haven: Yale Univ. Press。

〈キーワード〉 『中辺分別論』, 波羅蜜多, pāramitā, 勝, parama, 行, pratipatti
(龍谷大学大学院)